

「愛に根ざし、愛に基礎を」

エペソ人への手紙 3 : 17

March.12.2023

## エペソ人への手紙 3 : 17 (パウロ)

### Preface

先週は、この聖書箇所の前半部分、「信仰によって、あなたがたの心のうちにキリストを住まわせてくださいますように」という御言葉について、考えて参りました。

今朝は、後半部分、「そして、愛に根ざし、愛に基礎をおいているあなたがたが」という御言葉について、考えていきたいと思っております。

数週間に渡って、使徒パウロの祈りから学んでおりますが、使徒パウロの祈りの中で、最も多く言及され、最も重きを置かれているのが「愛」です。

聖霊によって内なる人が強められる理由も愛であり、信仰によって心のうちにキリストを住まわせて頂く理由も愛であり、愛に根ざし、愛に基礎を置くことを通して、人知をはるかに超えた広く、長く、高く、深いキリストの愛を知ることが出来るようにと祈ります。

さらに、そのキリストの愛を知ることこそが、神の満ちあふれる豊かさにまで満たされることだと告白し、その告白がエペソ教会の信徒たちの告白となり、実体となっていくことを信じ、期待して祈ります。

このエペソ書 3 章におけるパウロの祈りは、そのすべてが、愛を求める祈りです。

祈りとは、神に何かを求めることではありますが、使徒パウロの神への求めは「愛」です。

なぜならば、愛こそすべてであり、愛こそこの世界に欠けているものであり、愛こそ人間に欠落しているものであり、愛の無さがすべての問題の根本原因だからです。

そして何よりも、神は愛だからです。

即ち、愛を求めることは神を求めることであり、神を求めることは愛を求めることであり、また、神を求めることは神の御姿であられるイエス・キリストを求めることであり、イエス・キリストを求めることは愛を求めることであり、キリストの愛を求め知るとは、物事すべての答えであります。

第一コリント 13 章で、「愛がないなら無に等しく、愛は決して絶えることがなく、いつまでも残り、一番優れているのは愛だ」と言っている通りです。

ですから、キリスト者になるとは、愛が何なのかが分からなかった者から、愛

が何なのかが分かる者へと変えられることでもあります。

その量り難き、知り難き、底知れぬキリストの愛を満ち溢れる豊かさにまで知らされていき、その愛に魅了され、染められ、深められ、そしてかしづき、喜んで主イエスを礼拝する者へと変えられるのが、キリスト者です。

使徒パウロは、愛を知ることにはキリストを知ることであり、キリストを知ることには愛を知ることであり、そのキリストの愛を知ることが神を知ることであるために、愛を求める祈りを献げました。

そのキリストの愛の豊かさに与ることこそが、私たちが祈り求める必要のある祈りであることを良く知っていたために、パウロは愛を祈り求めました。

私たちの祈りは、果たして、愛を求める祈りでしょうか？

私たちの内には、キリストの愛を知りたいという尽きぬ欲求があるのでしょうか？

そして、その欲求を、その望みを満たすための祈りが、私たちの祈りとなっているのでしょうか？

## Part One

パウロは、エペソ3：17で、「そして、愛に根ざし、愛に基礎を置いているあなたがたが」と祈っていますが、この言葉をじっと見て考えた時、私は何かこう負担に感じるような気が致しました。

「愛に根ざし、愛に基礎を置いているあなた。」

この言葉を読んで、「いや、僕は愛に根ざし、愛に基礎を置きたいとは常日頃思ってはいるけれども、『愛に根ざし』と、『愛に基礎を置き』と、あたかも僕自身の力で愛に根ざし、愛に基礎を置いているかのように感じる言い回しだなあ。そうは出来ていないし、違うよなあ」と思ってしまいました。

常日頃、事あるごとに、私たち自身悩まされることは、「愛が足りない、愛がない、愛を動機にすることが中々なれていない」ということだと思いますが、「愛に根ざし、愛に基礎を置いているあなたがた」と言われてしまいますと、「う〜ん、この言葉はどう受け止めていいのだろうか？」と悩んでしまいます。

そこで、他の聖書訳を探してみました。

すると新共同訳聖書では、この箇所を、「あなたがたを愛に根ざし、愛にしっかり立つ者としてくださるように」と訳していました。

つまり、「あなたがたは愛に根ざせていないけれども、愛に根ざせるように、愛に基礎を置けていないけれども、愛に基礎を置けるように」という願いを祈っているように訳されています。

この訳の方が、はるかにしっくりきます。

ただこの訳も、まだちょっと足りない気がするんです。

と言いますのも、「イエス・キリストをまだ知らなかった時は、確かに僕の内に、キリストの愛に対する概念も無ければ、思いもなかったけれども、少なくともキリストを信じ、キリストを知る者とされてからは、私の内にキリストの愛が注がれていることを感じるし、信じているし、本当にゆっくりほんの少しずつかもしれないけれども、確かに確実に、愛に根ざそうと何かが私の中でうごめいている。

愛に基礎を置くための作業を私なりにでも日々しようと努めたいと思えるようになっていく。

だから、全く愛に根ざせていない、または愛に基礎を置けていないというニュアンスが感じられてしまう訳も、ちょっとしっくりこない」という思いが致しました。

そして今度は、ロイドジョンズという20世紀最高の説教者と言われるイギリスの牧師だった方の本を見てみますと、そこには、『愛に根ざし、愛に基礎を置いているあなたがた』という御言葉は、『あなたがたは、愛に根ざすようにされてきたし、愛に基礎を置くようにされてきた』と訳すことが出来る」と言っていました。

合点ですね。

このロイドジョンズの訳こそ、前後の文脈から考えても、聖書全体から考えてもピッタリの訳だと思います。

自分の力や経験や知識で、愛に根ざし、愛に基礎を置いているのではなく、そんなことは不可能なことで、神の恵みが、私の内に住んでいて下さるキリストが、そのようにしてくださり、そうなるように今も導いて下さっているということです。

確かにエペソ書3：17の順番を見ますと、先に、「あなたがたの心のうちにキリストを住まわせてくださいますように」と言った後、「そして、愛に根ざし、愛に基礎を置いている」と祈っています。

つまり、心のうちにキリストがいて下さるがために成されているのが、可能となったのが、私たちが愛に根ざす者へと変えられていくということであり、愛に基礎を置く者へと変えられて行くということです。

## Part Two

聖書の教える愛は、私たちの力によるものではありません。

キリストが私たちの内におられることなくして、私たちが愛に根ざすなんていうことは起こることもなく、愛に基礎を置くなんていうことも起こらないわけです。

じゃあ、キリストが私たちの内にいて下さりさえすれば、すべてお任せで、す

べて神様が勝手にやってくださるのかと言いますと、愛はそういうものではありません。

愛の最も大きな特徴のうちの一つが、相手がいるということです。

打ち合う、共鳴し合う相手がいれば、初めて愛は成り立ちます。

手の中のシンバルが片方1枚だけでは空を打つように、カスタネットが上か下かどちらかだけでは音を出せないように、愛も、相手がいれば初めて成るものです。

つまり、私の内において下さるイエス様お一人だけで、私という人を愛に根ざさせることも、愛に基礎を置かせることもお出来になりません。

神だからと言って、愛にはいつも相手が必要だという愛を成り立たせる原理を、公式を、枠を取っ払って、無視して、愛を成らせるなんていう道理、筋道の立たないことはなさいません。

またもし、それをもって「愛」だと主張されたならば、その時点でもう、愛ではなくなってしまいます。

それは、支配であり、強制です。

なので、「神は愛なり」という言葉だったり、神のなさることを「愛」という言葉で表現することほど、良く考えてみますと、奇妙なことはないように思うんです。

「愛」と表現した時点で、ある意味、相手がいなければ成り立たないという枠の中に、神ご自身を閉じ込めてしまうことになります。

聖書で何度も言っていますが、神というお方を何かに閉じ込めたり、収めておいたりすることは当然ながら出来ません。

ソロモン王が、「実に、天も、天の天も、あなたをお入れすることはできません。まして私が建てたこの宮など、なおさらのことです」と祈ったように、何物をもってしても、神なるお方を囲えるようなものは存在致しません。

なのに、なのにです。

神自ら、「愛」という枠の中でご自身を表し、「愛」という規格、型、法則、原理の中にご自身お入りになって、「神は愛なり」と言われることを良しとされ、さらには喜んでまで下さいます。

神は、唯一、何者にも依存せず、影響も受けず、頼ることもなく存在される、唯一自ら存在される自存なるお方です。

この世界に存在する、全宇宙、ありとあらゆるものは、互いに互いが影響し合い、依存し合い、頼り合って、初めて存在することが出来、またそのように神によって造られています。聖書の語る神はそういう次元に収まるお方ではありません。

モーセが神様に、「あなたは何者ですか？」と尋ねた際、「わたしは、『わたしはある』という者である」とお答えになられたように、唯一自存されるお方です。

なのに、「愛」という、相手がいなければ決して成り立つこともなく、微かな音さえ出すことも出来ないものに、自らお入りになり、「愛」にご自身を表し、その「愛」を成り立たせる相手として、私たちをお選びになりました。

この事実に、使徒パウロは、考えれば考えるほど、研究すれば研究するほど、祈れば祈るほどに、圧倒され、驚かされ、筆舌に尽くしがたい思いになるわけです。

### Part Three

愛という音を鳴り響かせるために、神は、人間のお姿をとって、イエス・キリストとしてこの世界にお生まれ下さいました。

人としてお生まれなされたのです。

神だからと言って、その威光と尊厳と栄光と誉れのまま、私たちの前にそのお姿を現しなされたのではなく、生々しい一人間として、お生まれ下さいました。

なぜならば、私たちという欠けのある片方のシンバルと、傷物のととてもとても音なんか出せないぐらいにその木が腐ってしまっている片方のカスタネットのような私たちと合わさって綺麗な音を出すために、お生まれ下さいました。

ヘブル書4：15に行ってみます。

### ヘブル人への手紙4：15（パウロ）

と言われるように人として生々しく生きられ、そして、愛という音の出し方を忘れ、知らない私たちのために、十字架に架されました。

欠けがあって、とてもとても美しい音色なんか出せない片側だけのシンバルのような私たち、傷だらけで腐りかけている片側だけのカスタネットの端くれのような私たちを造りかえて、神と合わさって愛という美しい音色を出すための唯一の方法は、神の御姿なる主イエスが十字架に架かれ、私たちのすべての罪を贖い、新しく造りかえ、新しく生まれさせるしかありませんでした。

そうして、新しく造りかえられた者たち、その十字架が私のためであると告白する者たちは、「だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去り、見よ、すべてが新しくなりました」という宣言と共に、神と共に、キリスト共に愛を奏でる者へと造りかえられたのです。

ただ一つここで考えたいことは、人が音を奏でるということをしてみますと、誰もがすぐに気付くことがあるということです。

それは、初めから美しい音なんか奏でられないということです。

声で奏でる時も、楽器で奏でる時も、初めから美しい音は奏でられません。

練習が必要です。

神様は、平等で、公平なるお方だということが、音楽をやればすぐに分かります。

どんなに才能がある人でも、練習を怠り、練習をしなければ、いい音を出すことは出来ません。

スポーツもそうですね。

大学時代アメリカンフットボール部にいた時、一つ上の先輩に、「ああ、この人は才能があるなあ」と思った方がいたのですが、あまりパツとしないで選手生活を終えてしまいました。

その理由はたったひとつです。

才能は有るのに、練習をしないんです。

私は玉置浩二さんという歌手が好きで、良く彼の歌を聞くのですが、彼の声はただの声じゃないと言いましょうか、もう体全体が楽器のような感じがするんです。

その歌声から情景が思い浮かび、心の琴線に触れると言いましょうか、なんか違うんです。

何年か前からフルオーケストラと一緒にコンサートを開いているのですが、オーケストラの美しい大音量に全く負けていない声量と素晴らしい歌声で歌われるのですが、そんな彼を見て私は、「なんてすごい才能なんだろう。こういうのを天賦の才能と言うんだろうなあ」と思っていたのですが、玉置浩二さん自身があるインタビューでこんなことを言っておられたのを見たことがあります。

「僕も練習をしないと声が出ないんです。ここ最近だと、年を重ねるにつれて声が出にくくなっているので、練習するしかないんです」と仰っていました。

私が小学生の頃からご活躍されており、テレビの音楽番組でも、目を細め渋い顔をしながら熱唱している姿をよく見ていたのですが、若い頃の玉置さんの声よりも、年を重ねた50代以降の声の方が、こう人間味あふれると言いましょうか、体温や温もりが感じられる、ふくよかで懐の広い、正に体全体が楽器のような声になっているなあと思っていたのですが、「年を取って声が出にくくなっている」という彼の言葉に驚いたことがありました。

そんな彼が、なおも美しい声という音を奏でるためにしているのが、練習だと言うのです。

先週も、「キリストを私たちの心のうちに住まわせてくださいますよう、御言葉に耳を傾け、聖書を読む練習を、祈る練習を、赦す練習を、自分を否定する練習を、そして、愛する練習をするんです」という話をしましたが、その練習は私たち一人でするものではありません。

私の内にいて下さいますキリストと共にする練習です。

そのキリストと共にする愛の練習が、どこにまで至るのかと言いますと、こういうところにまで至ります。

**ガラテヤ人への手紙2：20（パウロ）**

キリストとの愛の練習は、「もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです」というところにまで至ります。

シンバルが二枚あって初めて一つのシンバルとして美しい音を奏でられるように、カスタネットが二枚あって初めて一つのカスタネットとして軽快で粋な音を奏でられるように、イエス・キリストともに奏でる愛の練習は、いつのまにか私たちがキリストと一つにしてくれます。

ともに美しい音を奏でることを練習するうちに、練習させていただくうちに、つたない練習に合わせて頂きながら、その練習を導いて頂きながら、時間を共にして下さっているうちに、愛に根ざしていくように変えられ、愛に基礎を立てるようにされていく。

この霊的神秘をパウロは祈りの中で、「愛に根ざし、愛に基礎を置いているあなたがた」と表現するのです。

#### Part Four

「根ざし」という言葉は、木を連想させる言葉です。

吹けば倒れるような木ではありません。

どんな大きな風が吹いても決して倒れることのない、土中の石や岩盤をも貫く程に根深く根を張った堂々とした木です。

そして、その木の寿命は、「果たしてどれ程なのだろうか？」と想像もつかない程に長く長く生きる木であり、少しずつかもしれないけれども、確かに確実に成長し、葉を生い茂らせ、花を咲かせ、実を実らせ、時には木陰となり、時には風よけとなり、常々水と澄んだ空気を供給し、たくさんの命を育む木です。

これが、キリストと共に「愛に根ざす」という姿です。

また、「基礎を置く」とは、どんな揺れにも耐え、どんな攻撃も跳ね返し、どんな膨大な水の流れや波に遭ったとしてもその場に立ち続ける、底深く、底堅い土台を意味します。

とりあえず、そこに身を置きさえすれば、命が危ぶまれるようなことはありません。

とりあえず、そこにしがみ付くことさえしていれば、助かる道が必ずや開かれる崩れ難き土台です。

キリストの愛に根ざし、キリストの愛に基礎を置くとは、そういうことです。

そういうことを言い表したくて、パウロは、愛に根ざし、愛に基礎を置くと表現しました。

この植物と建物に例える組み合わせは、パウロ先生の得意とする表現方法でもありました。

**コリント人への手紙第一 3 : 6 - 11 (パウロ)**

私たちの根ざすところはイエス・キリストであり、私たちの土台はイエス・キリストです。

そして、根ざし、土台であられるイエス・キリストと共に奏でる音は、愛です。

さらに、イエス・キリストと共に奏でる愛は、私とイエス様の間だけで終わるようなナルシスト的な、自己愛的な、自己陶醉、自己満足的なものではありません。

その音は、必ずや、外に向かって、人に向かって奏でられるものです。

外に向かって、人に向かって奏でられて、初めてその奏でられた愛は、愛となります。

### マタイの福音書 22 : 35 - 40 (パワポ)

神と奏でる、キリストと奏でる愛は、隣りに及んで初めて愛となります。

「私は神を愛している。そして、神も私を愛して下さっている」というところだけに固執し執着するならば、それは愛ではなく、自己愛です。

自己陶醉であり、自己満足です。

隣りにキリストと奏でる愛が響き伝わって行って、初めてそれは愛となります。

また、それこそ、神が、キリストが奏でたい、私たちに期待し、望んでおられる愛です。

では、隣りにとは誰なのか？

隣りにとは、誰にまで至ることなのか？

### マタイの福音書 5 : 43 - 48 (パワポ)

愛は誰にまで至って、その愛は愛となるのか？

「敵にまで至るものだ」と、イエス様仰います。

48節に出てきます「完全」という言葉は、「愛」という言葉に置き換えることが出来ます。

即ち、「あなたがたの天の父が愛であるように、愛でありなさい」という言葉に言い換えることが出来ます。

聖書の中で負担に感じる言葉はたくさんあれど、その中で最も負担に感じる言葉を一つ挙げろ言われれば、この御言葉ではないでしょうか。

「あなたがたの天の父が完全であるように、完全でありなさい。あなたがたの天の父が愛であるように、愛でありなさい。」

この御言葉の成就是、私たち罪人には、とてもじゃないですが、不可能です。私たちにとっては、到底有り得ない神のお言葉です。



ですが、イエス様は、躊躇なくこのお言葉を宣言なさいました。  
なぜか？  
イエス様がなされるからです。  
誰と？  
私たちとです。

### Conclusion

シンバルやカスタネットのみならず、バイオリンだって、弓が良くなければ綺麗な音が出ません。

だからイエス様は、到底愛を奏でるのに相応しくない私たちを造り変え、イエス様と共に愛を奏でるパートナーに相応しく造りかえるために、十字架に架かられました。

罪の奴隷として生きる呪縛から私たちを解いて下さり、愛に生きる神の子として生きたいと思う者へと変えて下さいました。愛することは、何にも代えがたい喜びだということを知れる者へと変えて下さいました。

そして、イエス様と愛を奏でる者へと、練られ、磨かれ、訓練され、その訓練の時間を共にして下さっておられます。

そうして私たちは今、ここに至るまで歩ませて頂きました。

私たちが私たちのことをどう思おうと、イエス様は私たちを、愛に根ざし、愛に基礎を置く者へともうすでに入れてくださっており、私たちは入れられています。

入れられていますので、勝手に辞めることは出来ませんし、神様は、言うまでもなく、何が何でも、私達をその愛に根付かせ、愛に基礎を置かせ、愛を一緒に奏でようとして下さいます。

変えておられます。今も、変えようとして下さっています。

誰が言ったか、聖書のどこにも書かれていないのに、あたかも聖書のど真ん中にドカッと書いてあるかのように、「あなたはそのまま愛されている」という福音らしき福音ではない言葉にいつまでもしがみつき、その言葉の周りをうろくろぐるぐる回っているばかりで、いつまでも神に変えて頂こうと、変わろうと決意をしないイスラエルの民たちのようではなく、

一度キリスト者とされたからには、変えて頂く恵みを喜び、変えて下さる主により頼み、変えて頂くことに喜びを感じながら、キリスト共に愛に根ざし、愛に基礎を置きながら、歩ませて頂きたいと思うのです。

キリスト者の人生は、キリストの身丈にまで変えて頂くという福音に生きる人生です。

だから、キリストと共に愛を奏でる練習を諦めるのは辞めたいと思うのです。愛の練習を生活の基盤とし、人生の生き様として生きたいと思うのです。

「神は愛なり」です。

最後にローマ書の御言葉を読んで終えたいと思います。

ローマ人への手紙 12 : 2 (パウロ)

この世と調子を合わせてはいけません。むしろ、心を新たにすることで、自分を変えていただきなさい。そうすれば、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に喜ばれ、完全であるのかを（愛であるのかを）見分けるようになります。

お祈りいたします。

祝祷：マタイの福音書 5 : 48

ですから、あなたがたの天の父が愛であるように、愛でありなさい。